



Kobe Shoin Women's University Repository

KARASHI-DANE

「飼いならす」から読み解く『小さな王子さま』 (1)

著者	木谷 吉克
著者別名	KITANI Yoshikatsu
雑誌名	研究紀要．人文科学・自然科学篇
巻	52
ページ	65-81
発行年	2011-03-03
URL	http://doi.org/10.14946/00001511



「飼いならす」から読み解く 『小さな王子さま』(1)

木 谷 吉 克

サン＝テグジュペリの《Le Petit Prince》の日本語訳が、『星の王子さま』という題で初めて出版されたのは、1953年（昭和28年）のことである。翻訳者は内藤濯で岩波少年文庫の1冊として出た。内藤濯のご子息である内藤初穂の『星の王子の影とかたちと』によれば、初めの頃は「フランス語テキストの訳本として読まれる程度にすぎなかった」¹ そうである。ところが、10年後の1962年に、それまでの文庫本を改め、大型の単行本に装いを変え、サン＝テグジュペリ自身の描いた挿絵も1色刷りから多色刷りに変わってから、発行部数が急増の傾向を示し始めたそうである。その後はベストセラーからロングセラーへと移り、現代においてもこの書の人気は衰えを知らない。

この内藤濯訳『星の王子さま』の著作権が2005年に切れたのを受けて、いろんな出版社が競うようにして新しい翻訳書を刊行した。現在それは16冊に上っている。私は新訳書が《apprivoiser》（飼いならす）をどのように訳しているのかに特に注目して読んだ。というのも、旧訳『星の王子さま』では、《apprivoiser》はその場その場でいろいろと訳し変えられて、それらが同じ語の訳であることがわからなくなってしまうという大きな問題点があったからである。《apprivoiser》はこの作品を読み解く上で最も重要なキーワードであると私は考えている。それをいろいろと違ったことばに訳せば、この作品のなかで《apprivoiser》がどのような意味を持ち、いかなる働きをしているのかを捉えることが難しくなる。幸い、16冊中12冊の新訳書では、《apprivoiser》は終始ひとつの同じ語で訳されている。当然そうでなければならないだろう。

では、内藤濯訳『星の王子さま』のその問題点とは何なのか、それをまず明らかにしておきたい。

1. 旧訳『星の王子さま』の問題点

旧訳『星の王子さま』では、「apprivoiser」は、初めは「飼いならす」と訳されている。この語は、王子さまから「いっしょに遊ぼう」と誘われたキツネの返答のなかに初めて現れる。原文と内藤訳とを掲げる。また、原文の「apprivoiser」と、それに対応する訳語とに下線を引いている。

① Je ne puis pas jouer avec toi, dit le renard. Je ne suis pas apprivoisé.

内藤訳：「おれ、あんたと遊べないよ。飼いなされちやいないんだから」と、キツネがいました。

王子さまは、キツネの言った「飼いならす」という耳慣れないことばを聞いて、キツネにその意味をたずねる。キツネは王子さまの質問にすぐには答えず、やっと3度目に次のように答える。

② C'est une chose trop oubliée, dit le renard. Ça signifie "créer des liens".

「よく忘れられてることだがね。＜仲よくなる＞っていうことさ」

ここでまず問題であるのは、「apprivoiser」の意味として提示されている「créer des liens」を「仲よくなる」と訳していることである。素直に訳せば「絆を作る」であり、なぜわざわざ「仲よくなる」と訳す必要があるのか理解に苦しむ。それに「絆」は、サン＝テグジュペリの作品において頻出する語のひとつであり、独特な意味場を持つ重要なことばである。さらに言えば、「飼いならす」と「絆を作る」では、ふつうそれらが意味するものはかなり違う。そういう相対的にかき離れた2つの語を近づけることである種のインパクトが生まれる。それを「仲よくなる」と訳せば、ここを原文で読むときにおそらく読者が感じるであろうインパクトが消えてしまうことになる。

「apprivoiser」に関しては、内藤濯がそれを「飼いならす」と訳するのは、次にあげるキツネのせりふまでである。

③ Mais, si tu m'apprivoises, nous aurons besoin l'un de l'autre. Tu seras pour moi unique au monde. Je serai pour toi unique au monde...

— Je commence à comprendre, dit le petit prince. Il y a une fleur... je crois qu'elle m'a apprivoisé...

内藤訳：「だけど、あんたが、おれを飼いならすと、おれたちは、もう、おたがいに、はなれちゃいられなくなるよ。あんたは、おれにとって、この世でたったひとりのひとになるし、おれは、あんたにとって、かけがえのないものになるんだよ…」と、キツネがいました。

「なんだか、話がわかりかけたようだね」と、王子さまがいました。「花が一つあってね…。その花がほくになついていたようだけど…」

最初の「apprivoiser」はこれまでどおり「飼いな

らす」と訳しているものの、あとの王子さまのせりふのなかの「apprivoiser」を、内藤は「なつく」と訳している。「apprivoiser」には、「(動物を)飼いな

らす」という意味だけでなく「(人

を)手なづける、なつくようにする」という意味もある。仮に後者の意味にとったにしても、ここは「花がほくをなつくようにしたように思う」という意味になるので、なついたのはむしろ「ほく」のほうである。

それはともかく、この「apprivoiser」を「なつく」と訳すと、直前のキツネのせりふのなかの「飼いな

らす」との関係がぼやけてしまう。ここはやはり原文に忠実に「その花がほくを飼いな

らしたように思う」と訳すべきである。この場面では、キツネは先に述べた「飼いな

らす」＝「絆を作る」ことの意味を明らかにするために、自分と王子さまとの仲になぞらえて語っている。もし2人のあいだに飼いな

らし、飼いな

らされるという関係が生まれるなら、王子さまはキツネにとって、ただの男の子ではない特別な存在になり、キツネもまた王子さまにとって、ただのキツネではない特別な存在になる。つまり、飼いな

らすことによって、2人のあいだにかけがえのない特別な絆が作り出されるということを、キツネは王子さまに教えるのである。それを聞いて、王子さまは自分の星に残してきたバラと自分との関係が、まさにキツネの言う飼いな

らすという関係であったのではないかということに思いいたる。「わかりかけてきた」(内藤訳では「なんだか、話がわかりかけたようだね」という王子さまのことは、そういう王子さまの心を表している。

旧訳『星の王子さま』では、「apprivoiser」はこれ以降もはや「飼いな

らす」と訳されることはない。「なつく」もこの場面のみである。代わって最もよく使われる訳語は「仲よくする」である。1例のみをあげておく。

④ Mais, si tu m'apprivoises, ma vie sera comme ensoleillée.

内藤訳：だけど、もし、あんたが、おれと仲よくしてくれたら、おれは、お日さまにあたったような気持ちになって、暮らしてゆけるんだ。

すでに述べたように、内藤濯は「apprivoiser」（飼いならす）のいわば定義である「créer des liens」（絆を作る）を「仲よくなる」と訳していた。その定義の訳語とほぼ同じ訳語「仲よくする」を、今度は「apprivoiser」の訳語として使っている。これでは「仲よくする」の定義が「仲よくなる」ということにもなり、まさに同語反復以外のなにものでもない。

「仲よくする」以外に、「じぶんのものにする」と「めんどうみる」という訳語が、それぞれ1箇所使われている。これについては、またのちに触れる。

このように内藤濯は「apprivoiser」を幾とおりにも訳し分けている。「飼いならす」「なつく」「仲よくする」「じぶんのものにする」「めんどうみる」という語が、原文ではすべておなじ語の訳語であるとだれが気づくことができるだろう。翻訳でことばが違えば、原文でも違ったことばが使われていると思うのがふつうである。

では、内藤濯はなぜこのように同じ「apprivoiser」を、時に応じていろいろ違ったことばに訳し変えたのか。これについては内藤自身の証言はない。内藤初穂は『星の王子の影とかたち』のなかで、父親の「apprivoiser」の訳し方について、「どうやら父は、子どもの読者を意識しているように思われます。『星の王子さま』は童話ではない、童話を超えていると自分でいっておきながら、＜岩波少年文庫＞は子どものための本という考えが頭にあった」²と言っている。これは内藤初穂の推測でしかないものの、おそらくこの推測は当たっているだろう。内藤濯はこの作品が子ども向けのものであるので、できるだけ子どもにもわかるやさしいことばで訳そうと努めているようにみえる。「飼いならす」ということばには、なにかしら奇妙な語感があり、それは子どもたちのふつうに使うことばではないうえに、子どもたちにはわかりにくい。そこで「飼いならす」という訳語は最初だけにして、あとはもっとわかりやすい語に変えたのではないだろうか。

「apprivoiser」とも関係し、「apprivoiser」とともにこの作品のなかで重要な役割を担っている語、「responsable」（責任がある）の訳し方についてもまったく

同じことが言える。これについてはのちに触れることにする。

原文でこの作品を読んでいると、キツネが登場してからあとは、「apprivoiser」という語が何度も出てくる。しかも作者はこの語に通常とは違う独特の意味を担わせているように見える。しかもその意味がなかなか捉えがたいために、この語をどのように読み解いていけばいいのだろうという思いに捉えられる。つまり「apprivoiser」という語に引っ掛かるわけである。そういう引っ掛かりをもって「apprivoiser」という語の出てくるところを注意して読んでいけば、作者がその語に込めた意味やニュアンスといったものが次第にわかってくる。そして、それがこの作品を読み解く糸口にもなる。

事実、「apprivoiser」は作品を読み解く上で最も重要な語であると私は考えている。内藤濯訳でこの作品を読めば、「apprivoiser」の訳語が頻繁に変わるために、読者はそうした語に引っ掛かることはあまりないだろうと思う。たとえあったとしても、それらの語の独特の意味やニュアンスを捉えることは難しくなるだろう。

この作品のなかで、サン＝テグジュペリは「apprivoiser」をどのような意味で使っているのか、また、飼いならすことがこの作品中でどのような意味を担っているのか、それを次章で明らかにしていきたい。

2. 飼いならすこと、知ること、時間をかけること

フランス語の辞書 PETIT ROBERT の「apprivoiser」の意味は、以下のとおりである。

1. Rendre moins craintif ou moins dangereux (un animal farouche, sauvage), rendre familier, domestique.
2. Rendre plus docile, plus sociable.
1. (人になつかない野生の動物を) 人をこわがらず、また人に危害を加えないようにしていく。なれ親しい、飼いならされたものにしていく。
2. より従順に、より社交的にする。

サン＝テグジュペリはこの2つの意味をもとにしながら、彼独自の意味をこ

の語に担わせている。特に2つの存在の間の心理的隔たりを徐々に縮め、両者のあいだの親密度を増大させてゆくという意味で使っている。「飼いならす」とは「絆を作る」ことだとキツネが言うのは、この意味においてである。

一般に「飼いならす」とは、人間が動物に対して行なうことで、飼いならすものが上位にあり、飼いならされるものが下位にある。しかし、この作品では、サン＝テグジュペリはそうした上下関係や主従関係を捨象して「飼いならす」という語を用いている。この作品では、飼いならすことは同時に飼いならされることであり、飼いならす者は同時に飼いならされる者、飼いならされる者は同時に飼いならす者である。つまり、飼いならすということは、対等の関係の2つの存在のあいだで、双方向になされるのである。

飼いならすことの意味はそれだけではない。飼いならすためには何が必要で、飼いならすことが何を招来するのか、キツネは王子さまに教えている。いっしょに遊ぼうという王子さまの申し出に、「飼いならされちゃいけないから」と言って断ったキツネであるが、話をしているうちに王子さまに好感をもち、また自分の生活の単調さ、退屈さを打破したいという思いもあって、今度は自分から「ねえ、ぼくを飼いならしてよ」と、キツネは王子さまに願い出ることになる。ところが小さな王子さまはそれを断る。ここのキツネと王子さまの対話は、この作品を理解するのにひじょうに重要なところである。原文と内藤訳と私訳とを掲げる。

⑤ Le renard se tut et regarda longtemps le petit prince :

« S'il te plaît... apprivoise-moi ! dit-il.

— Je veux bien, répondit le petit prince, mais je n'ai pas beaucoup de temps. J'ai des amis à découvrir et beaucoup de choses à connaître.

内藤訳：キツネはだまって、長いこと、王子さまの顔をじっと見つめていました。

「なんなら…おれと仲よくしておくれよ」と、キツネがいました。

「ぼく、とても仲よくなりたいんだよ。だけど、ぼく、あんまりひまがないんだ。友だちも見つけなけりゃならないし、それに、知らなけりゃならないことが、たくさんあるんでねえ」

木谷訳：キツネは口をつぐみ、長いこと小さな王子さまを見つめていました。

「ねえ、ぼくを飼いならしてよ」とキツネは言いました。

「ほんとうはそうしたいんだけどね」と小さな王子さまは答えました。「でも、あまり時間がないんだ。友だちを見つけなけりゃならないし、知らなければならぬこともたくさんあるし」

すでに述べたように、内藤濯は「*apprivoiser*」の訳語を、「飼いな

らす」から「仲よくする」に変えている。しかし「*apprivoiser*」を同じ語で訳していかなければ、翻訳で読む場合、「*apprivoiser*」（飼いな

らす）の意味をとらえることは難しくなる。

ここで王子さまは、友だちを見つけたり、いろんなことを知るのに時間が必要で、そのために、キツネを飼いな

らす時間が自分にはないんだと言って、キツネの申し出を断る。それを聞いて、キツネは飼いな

らすことがどういふことなのか、王子さまはわかっていないことに気がつく。そこでキツネは次のように言う。

⑥— On ne connaît que les choses que l'on apprivoise, dit le renard. Les hommes n'ont plus le temps de rien connaître. Ils achètent des choses toutes faites chez les marchands. Mais comme il n'existe point de marchands d'amis, les hommes n'ont plus d'amis. Si tu veux un ami, apprivoise-moi !

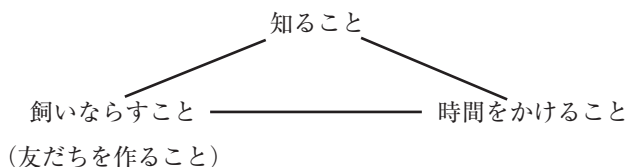
内藤訳：「じぶんのものにしてしまったことでなけりゃ、なんにもわかりやしないよ。人間ってやつあ、いまじゃ、もう、なにもわかるひまがないんだ。あきんどの店で、できあいの品物を買ってるんだがね、友だちを売りものにしてるあきんどなんて、ありやしないんだから、人間のやつ、いまじゃ、友だちなんか持てやしないんだ。あんたが友だちがほしいんなら、おれと仲よくするんだな」

木谷訳：「飼いならしたもののしか知ることはできないよ」と、キツネは言いました。「人間たちにはもう何かを知る時間っていうのがないんだ。商人たちのところで、できあいのものを買っているんだけど、友だちを売って商人なんていないから、人間たちにはもう友だちなんていないんだ。も

しきみが友だちをほしいなら、ほくを飼いならすことだよ！」

王子さまは、飼いならすことは、友だちを見つけることや知ることとは別個のことがらであると思っていた。しかし、キツネはそれらがひとつに結び合っているということを教える。「飼いならしたもののしか知ることはいできないよ」というのは、飼いならすことと知ることが切っても切れない関係にあるということを言っているのである。言い換えれば、飼いならすことは知ることでもあるということである。ここを内藤のように、「じぶんのものにしてしまったことではなけりゃ、なんにもわかりゃしないよ」と訳せば、飼いならすことと知ることとの関係を捉えることは難しくなるだろう。

さらにキツネは、時間をかけずに知ることも、飼いならすことも不可能であるということを王子さまに教える。逆に言えば、飼いならすこと、知ることには時間が必要であるということである。人間たちはもはやなにごとにも時間をかけようとしない。手っ取り早くできあいのものを買って、それで満足している。そのため、人間たちはもはや何も知ることができなくなってしまっているし、友だちもいない。友だちは店の商品のように、見つけて買えるものではない。友だちは見つけるものではなく、作るものである。時間をかけて2人のあいだに少しずつ絆を作り上げてゆくことによって、おたがいがおたがいに友だちになっていくのである。つまり時間をかけてたがいに飼いならしあうことによってしか、友情は築けないのである。だからキツネは、王子さまが友だちをほしいなら、自分を飼いならすよう勧めるわけである。要するに、キツネは王子さまに、図1のように、飼いならすこと（友だちを作ること）、知ること、時間をかけることの三つが、それぞれ別個のことがらではなく、ひとつに結び合っているということを教える。



(図1)

このキツネの勧めに応じて、王子さまはキツネを飼いならす。そうして飼いならずということを、実際に身をもって経験することになる。王子さまはさらにキツネから、時間をかけることの意味を伝授される。

3. 時間をかけなければ大切なものは手に入らない

キツネは王子さまとの別れが近づいてきた時に、王子さまに地球の庭に咲く5千ものバラの花をもう1度見に行くよう勧める。王子さまは地球に来て間もない頃に、5千ものバラが咲き乱れる庭に行き当たる。そしてバラたちがみな自分の星のバラにそっくりなのに驚く。この世にたったひとつしかない珍しい花を持っているせいで自分が豊かだと思っていた王子さまは、実はありふれたバラを1輪持っているにすぎなかったことに気がつく。そしてバラのことだけでなく、あらゆることで自分はこれまでいろんな思い込み、幻想に捉えられていたのではないかという反省が起る。そうして、そのような新たな目で見ると、自分はしょせん貧しくちっぽけな王子でしかないということに思ったり、王子さまは自分に幻滅し、失望して泣き出してしまう。地球の庭に咲く5千ものバラの花とは、そのようなきさつがあったのである。

再びバラたちを見に出かけた王子さまは、庭のバラたちが、自分の星のバラとはまったく違うことに気がつく。

⑦ Vous n'êtes pas du tout semblables à ma rose, vous n'êtes rien encore, leur dit-il. Personne ne vous a apprivoisées et vous n'avez apprivoisé personne.

内藤訳：そしてこういいました。「あんたたち、ぼくのバラの花とは、まるっきりちがうよ。それじゃ、ただ咲いているだけじゃないか。だあれも、あんたたちとは仲よくしなかったし、あんたたちのほうでも、だれとも仲よくしなかったんだからね」

木谷訳：「あなたたちはぼくのバラとはまったく似ていない。あなたたちはまだなにものでもないんだ」と王子さまはバラたちに言いました。「だれもあなたたちを飼いならさなかったし、あなたたちもだれをも飼いならさ

なかった」

キツネと出会う以前、地球の庭に咲くバラたちのすべてが自分の星のバラにそっくりなのに驚き、失望し、泣いてしまった王子さまであるのに、ここではバラたちは「ほくのバラとはまったく似ていない」とまで言う。この違いはどこから来るのか。それは王子さまの「だれもあなたたちを飼いならさなかったし、あなたたちもだれをも飼いならさなかった」ということばに明らかである。王子さまはキツネと出会い、キツネから飼いならすということを教えてもらう。しかも実際にキツネと飼いならしあうことによって、キツネが前に言っていたように、おたがいがおたがいにとって特別な存在になるということを、王子さまは身をもって経験する。⑦に引用したことばに続けて王子さまは言っている。

⑧ Vous êtes comme était mon renard. Ce n'était qu'un renard semblable à cent mille autres. Mais j'en ai fait mon ami, et il est maintenant unique au monde.

内藤訳：「ほくがはじめて出くわした時分のキツネとおんなじさ。あのキツネは、はじめ、十万ものキツネとおんなじだった。だけど、いまじゃ、もう、ほくの友だちになってるんだから、この世に一ぴきしかいないキツネなんだよ」

木谷訳：「あなたたちはかつてのキツネとおんなじだ。あのキツネは、他の10万ものキツネにそっくりのただのキツネにすぎなかった。だけどほくはそのキツネを友だちにしたんだ。だから今では、ほくのキツネはこの世にただひとつの存在になっているんだ」

王子さまにとって、キツネが「他の10万ものキツネにそっくりのただのキツネ」から「この世にただひとつの存在」へと変わったのは、王子さまがキツネを友だちにしたから、つまりは飼いならしたからである。しかしながら、地球の庭に咲くバラたちとのあいだには、そのような関係は築かれていない。それゆえ、バラたちは「かつてのキツネとおんなじ」にしか見えないのである。

一方、王子さまが自分の星に残してきたバラとのあいだには、今では王子さまには理解できるのだが、飼いならすという関係がすでに築かれていたために、王子さまにとって、そのバラはこの世にただひとつの存在となっていたのである。地球のバラたちが自分のバラとは「まったく似ていない」のはそれゆえで

ある。戻ってきた王子さまにキツネは言う。

⑨ C'est le temps que tu as perdu pour ta rose qui fait ta rose si importante.

内藤訳：「あんたが、あんたのバラの花をととてもたいせつに思ってるのはね、そのバラの花のために、ひまつぶししたからだよ」

木谷訳：「きみのバラがそんなに大切なものになったのは、きみがそのバラのために費やした時間のせいだよ」

飼いなすことは知ることでもあるということはすでに述べたが、同じように、飼いなすことは時間をかけることでもある。相手のために時間を費やすことで、相手が自分にとって大切な存在になる。この相手は人間や動物にかぎらない。事物に対してもまた言えることである。

『小さな王子さま』³では、このあと転轍夫の話、丸薬商人の話と続くが、この2つの話では、この「時間をかける」ということが主題になっている。転轍夫の話では、特急列車の乗客たちは何を探しに右に左に急いでいるのかと王子さまは転轍夫にたずねる。転轍夫は機関車の運転手自身もそれを知らないと答える。さらに転轍夫は、乗客たちは車内で特にすることもなく、ただ眠っているかあくびをしているかしかしていない、ただ、子どもたちだけが窓ガラスに鼻を押しつけて、何かに没頭しているように見えると言う。それを受けて王子さまは次のように言う。

⑩ Les enfants seuls savent ce qu'ils cherchent, fit le petit prince. Ils perdent du temps pour une poupée de chiffons, et elle devient très importante, et si on la leur enlève, ils pleurent...

内藤訳：「子どもたちだけが、なにがほしいか、わかってるんだね。きれいでできた人形なんかで、ひまつぶして、その人形を、とてもたいせつにしてるんだ。もし、その人形をとりあげられたら、子どもたちは、泣くんだ…」と、王子さまがいました。

木谷訳：「子どもたちだけが、自分たちが何をさがしているのか知ってるんだね」と、王子さまは言いました。「子どもたちは、ほろきれでできた人形なんかに時間費やすんだ。すると、その人形がとても大切なものになる。だから人形がとりあげられたりすると、子どもたちは泣くんだ…」

子どもたちは、たとえばろきれでできた人形であろうと、それに時間を費やす。王子さまがバラに時間を費やしたために、バラが大切な存在になったように、それに時間を費やした人形は、子どもたちにはかけがえのない大切なものになる。飼いならすということは、その対象が人間や動物といった生物だけではなく、人形のような物にも行なわれる。子どもと人形は、王子さまとバラと同様、飼いならすという関係で結ばれていると言えるだろう。

次の丸薬商人の話では、のどの渇きを癒す丸薬を売る商人が登場する。1週間に1粒飲めば、もう飲む欲求を感じなくなるという。1週間で53分という時間の節約になると丸薬商人は言う。しかし王子さまは、その53分という時間をどう使うのかとたずねる。丸薬商人は「その時間を好きなように使えばいいさ」と、答えにもならない答えを返すばかりである。そこで王子さまは心のなかで思う。

⑪ « Moi, se dit le petit prince, si j'avais cinquante-trois minutes à dépenser, je marcherais tout doucement vers une fontaine... »

内藤訳: <ほくがもし、五十三分っていう時間、すきに使えるんだったら、どこかの泉のほうへ、ゆっくり歩いてゆくんだがなあ>と、王子さまは思いました。

木谷訳: 「ほくだったら」と、小さな王子さまは思いました。「もし53分という時間が使えるのなら、ゆっくりと泉に向かって歩いていくのになあ...」

王子さまはなぜこのように思ったのか。王子さまはすでにキツネから、時間をかけることの大切さを教えてもらっている。それだけではなく、実際に時間をかけてキツネを飼いならすことによって、キツネが自分にとって大切な存在になったことを経験している。時間をかけなければ大切なものは何も手に入らないということが、王子さまにはすでにわかっている。言い換えれば、あるもののために時間をかけて初めて、そのあるものがかけがえのない大切なものになるということが、王子さまにはわかっている。

のどの渇きをいやすために、時間をかけ、苦勞して泉にたどりつき、やっと水が飲めるとすれば、その水はかけがえのない貴重な水になる。それを手に入れるためにかけた時間と苦勞が、その水の価値を高くする。また、渇きの苦し

みが強ければ強いほど、渴きを癒してくれる泉にたどりついたときの喜びも大きくなる。そこで飲む水は、ことばで表わすことのできないほどうまいと感じるはずである。時間を節約するために、薬で渴きをなおしてしまえば、かけがえない貴重な水との出会いもなく、苦勞して泉にたどりついたときの喜びも味わえない。それに節約した時間を使って何かしたいことがあるのかどうかも疑問である。時間を節約することばかり考えていたら、大切なものは何も手に入れることができない。むしろ時間をかけることで、人は大切なものを手に入れることができる。王子さまが、もし53分という時間が使えるなら、泉に向かってゆっくり歩いていくのと思ったのは、そう考えていたためである。

この王子さまの思いは、丸薬商人の話に続く章で現実のものとなる。もう飲む水が1滴もなくなってしまった語り手と、王子さまは、砂漠のなかにほとんどあるはずもない井戸を探しに、ともに歩き始める。「こんな果てしもない砂漠のなかで、当てずっぽうに井戸をさがすなんてばかげている」と語り手は考えるものの、それでも歩き続け、とうとう夜明けに井戸を発見する。その井戸には、不思議なことに滑車も桶も綱もなんでもそろっていて、まるで村の井戸のようであった。語り手は桶で水を汲み、井戸の縁石にその桶を置く。そのとき王子さまは、「このような水をほくは飲みたかったんだ」と言う。語り手は王子さまに水を飲ませる。

⑫ Je soulevai le sceau jusqu'à ses lèvres. Il but, les yeux fermés. C'était doux comme une fête. Cette eau était bien autre chose qu'un aliment. Elle était née de la marche sous les étoiles, du chant de la poulie, de l'effort de mes bras. Elle était bonne pour le cœur, comme un cadeau.

内藤訳：ほくは、つるべを、王子さまのくちびるに持ちあげました。すると、王子さまは、目をつぶったまま、ごくごくとのみました。お祝いの日のごちそうでもたべるように、うまかったのです。その水は、たべものとは、べつなものでした。星空の下を歩いたあとで、車がきしるのをききながら、ほくの腕に力を入れて、汲みあげた水だったのです。だから、なにかおくりものでも受けるように、しみじみとうれしい水だったのです。

木谷訳：ほくは桶を王子さまのくちびるのところまで持ちあげました。

王子さまは目を閉じたまま飲みました。まるでお祭りのときのように、心にしみるひとときでした。その水は飲みものとは別のものでした。星々の下の歩み、滑車の歌、ほくの腕の力から生みだされた水なのです。それは、なにか贈りもののように、心によいものだったのです。

王子さまと語り手が夜通し歩き続けたはてに見つけた井戸。その井戸の水は、2人がかけた時間と苦労によって、また2人の友情によって、ただの「飲みもの」ではなくなって、2人にとってかけがえのない特別な水となったのである。バラのためにかけた時間が、王子さまに、バラをかけがえのない特別な存在にしたように、ここでは、それにかけた時間と苦労が、砂漠の井戸の水を特別な水に、「贈りもの」のように特別な意味を持った、「心によい」水にする。このように、飼いなすことは時間をかけることでもあり、時間をかけることによって、その対象は特別なものとなる。

それでは、キツネが言っていた飼いなすことと知ることとの関係はどのようなのか。実は、それが『小さな王子さま』のなかの最も有名なことば、「心で見なければよく見えない。かんじんなことは目では見えない」というキツネのことばに関係するのである。それについて論ずる前に、内藤濯の作品解釈について述べておきたい。

4. 童心崇拜批判

内藤濯が« *apprivoiser* »を「飼いなす」「なつく」「仲よくする」「じぶんのものにする」「めんどくみる」と、いくつもに訳し分けていることについて、そのわけは内藤がこの作品を子ども向けの作品と考えて、子どもにもわかることばで訳そうとしたためである、ということはすでに述べた。しかしおそらく、もっと大きな理由は、内藤が« *apprivoiser* »という語をそれほど重要な語であるとは考えていなかったからであると私には思われる。

内藤は『星の王子とわたし』のなかで、「サン＝テグジュペリにとっては、人間の幸福はその言動に基づくのではなくて、同胞とのしっくりした繋がりに因るのである。＜飼いなすっていうのは、仲よくなるっていうことさ＞と狐が

言う。王子がでくわしたおとなはすべて、この点で狐に責められるほかはない。(…) 国王にしても、地理学者にしても、幸福になれるはずがなかった。というのは、会いにくる人たちと結びつく心得がないからだ」⁴とやっている。

内藤にとって、「飼いならす」ことは単に「仲よくなる」ということにすぎない。そして「仲よくなる」とは、そのあとに彼自身書いているように、「会いにくる人たちと結びつく心得」を持つというようなことであるらしい。これでは飼いならすということが、相手と親しくなろうという気持ちを持ち、そうなるよう努めるといったことに過ぎなくなってしまう。サン＝テグジュペリの言う« *apprivoiser* » (飼いならす) は、そのような気持ちの問題に還元されるものではない。それは何よりも行為であり、相手との距離を埋め、相手の抵抗を徐々に克服して親密さを増していく過程を指す語である。飼いならすことによって築かれてゆく絆も、「同胞とのしっくりした繋がり」といった生易しいものではない。仲間たちとの通り一遍的な繋がりなどではなく、もっと深く強い独自の絆である。

内藤はこうも言っている。「飼いならすとは、相互依存のきずなを作り出すことでもある。(…) 花が王子を必要としているなら、王子もまた、花を必要としているからだ。王子と花はそうして、たがいに飼いならされたのである。花がいくら自分の美しさを鼻にかけていても、何人の厄介などにならない様子はしていても、二つの存在の間には、ちゃんとした生命の繋がりがあった」⁵。「相互依存のきずな」とは、おたがいに自分の足りないものを補い合い、困ったときには助け合うというようなことを指して言っているのだろうか。そうであるなら、この作品で言われている「絆」とは似ても似つかないものであるだろう。飼いならすことで築かれる絆によって、2人がたがいに大切な存在になるからこそ、また他と取り替えることのできない存在になるからこそ、たがいに必要になるのであり、相手が助けてくれるから、相手に頼れるから必要になるわけではない。

内藤渥は、サン＝テグジュペリが« *apprivoiser* » (飼いならす) に込めた意味を捉え切れていないようにみえる。言い換えれば、この語の重要性に気づいていないようにみえる。それゆえ、この作品の解釈の上で、飼いならすというこ

とは、彼はほとんど問題にしていない。実際、飼いならすことに内藤が触れているのは、今引用したところを除けばほとんどない。それに対して内藤にとって重要なのは、子どもごろの純真さやあどけなさといったことである。自分の訳した『星の王子さま』の「あとがき」に、内藤は次のように書いている。

「この童話を書いたサン＝テグジュペリのねらいは、つまるところ、おとなというおとなに、かつての子どもごろを取りもどさせて、この世の中をもっと息苦しくないものにしようとしたところにあるのでしょう。あるいは、いつまでも子どもごろを失わずにいるおとなこそ、ほんとうのおとなであることを、子どもにも、おとなにも知らせようとしたところにあるのでしょう。」⁶

これがこの作品についての内藤渥の解釈である。彼の言う「子ども」とは、「このころの目がまだくもらずにいて、物ごとの裏を見ぬく」⁷ことができ、「無意識のうちにも、物事をまるごと肌でうけ取る」⁸ことのできる、そうした者を指す。一方、「こころの新鮮さをうしなって、印象と判断のしぜんさにそっぽ向かれたあげく、物事の物質的なねうちしか知らなくなっている人」、「“詩”の美しさの慾ばなれした意味を解しない人」、「内面生活の働きをうしなった人」⁹といったものが、彼の言う「おとな」である。こうした「おとな」の姿こそ、功利主義と物質主義に毒された近代社会に生きる近代人の肖像であり、サン＝テグジュペリはそうした近代人批判を通して、近代社会批判を、この作品で行なっているというのが内藤渥の解釈である¹⁰。さらに内藤によれば、そうした批判を通して、いわゆる「子どもごろ」を称揚し、そうすることによってある種の社会改革を行なおうというねらいが、この作品にはあるというのである。

たしかにこの作品の前半部分だけを見るなら、そう解釈できないことはない。しかし、子どもごろを取り戻したり、子どもごろをおとなになっても失わないようにすることの大切さが、この作品のねらいであるとは私には思えない。そのような解釈が可能であるにしても、それがこの作品の本質に関わることであるとはとうてい思えない。この作品の後半部、キツネの登場以後は、「飼いならす」ということが軸になって話が展開されていく。そしてこの「飼いならす」ということが、前半部をも含めて、この作品全体の主要なテーマであることが明らかになっていく、というのが私の解釈である。

内藤は、「心で見なければよく見えない」ということも、童心に結びつけて解釈している。しかし、私にはそれもまた疑問である。この問題を次章で論ずることにする。

注

- 1 内藤初穂『星の王子の影とかたちと』、筑摩書房、2006年3月、pp.18-19
- 2 同上書、p.386
- 3 Le Petit Prince はそのまま訳せば「小さな王子さま」あるいは「王子さま」である。これを「星の王子さま」と訳したのは、内藤濯の独創である。「王子さま」の前に「星の」を付けて、インパクトのある魅力的なタイトルを創造したのは内藤濯の功績と言えるかもしれない。しかし、この論考では、原題に忠実に『小さな王子さま』を日本語タイトルとしたい。
- 4 内藤濯『星の王子とわたし』、文春文庫、1976年4月、pp.94-95
- 5 同上書、p.95
- 6 サン＝テグジュペリ作、内藤濯訳『星の王子さま』、岩波少年文庫、1953年、p.159 なお1988年版『星の王子さま』のあとがきでは、一部変更されて次のようになっている。「この童話を超えた童話を書いた作者のねらいは、つまるところ、大人という大人に、かつての子供ごころを取り戻させて、この世をもっと晴れやかにしようとしたところにあるのでしょうか。さもないければ、いつまでも子供ごころを失わずにいる大人こそ正真正銘の大人であることを、子供にも大人にも、知らせようとしたところにあるのでしょうか。」
- 7 内藤濯『星の王子とわたし』、文春文庫、1976年4月、p.39
- 8 同上書、p.75
- 9 同上書、p.75
- 10 内藤濯は次のように言っている。「したがって『星の王子さま』は、ただの作家の作ではない。航空士といたいけな王子とが、一週間そこそこ、人間の大地を遍歴する記録ではあっても、つまるところは、人心の純真さを失わぬおとなの眼に映じた社会批判の書である。」(同上書、p.4)

